

2024年9月1日（日）「第一から第四のラッパ」

ヨハネの黙示録 8:6-12

6 さて、七つのラッパを持つ七人の天使がラッパを吹く用意をした。

7 第一の天使がラッパを吹いた。すると、血の混じった雹と火が生じ、地に投げ入れられた。地の三分の一が焼け、木々の三分の一が焼け、青草もすべて焼けてしまった。

8 第二の天使がラッパを吹いた。すると、火の燃え盛る大きな山のようなものが、海に投げ入れられた。海の三分の一が血に変わり、9 海に住む生き物の三分の一が死に、船の三分の一が壊された。

10 第三の天使がラッパを吹いた。すると、松明のように燃えている大きな星が、天から降って来て、川という川の三分の一と、その水源の上に落ちた。11 この星の名は「苦よもぎ」と言い、水の三分の一が苦よもぎのように苦くなって、そのために多くの人々が死んでしまった。

12 第四の天使がラッパを吹いた。すると、太陽の三分の一、月の三分の一、星という星の三分の一が撃たれ、それらの三分の一が暗くなり、昼はその光の三分の一を失い、夜も同じようになった。

【序論】

ヘンデルのメサイアの中に「The Trumpet shall sound」（ラッパ鳴りて）というアリアがあります。バスだけでなくトランペットのソロ演奏が最も映える曲です。この曲のイメージは、ラッパの響きとともに死者が甦るという I テサロニケ 4:16 の内容が元になっていると思われます。世の終わり、この世界に対して重大なことが始まる時に御使いによるラッパの号令がある。今日の箇所はそれとは場面が違いますが、先立つ出来事として「審き」の始まりを告げるラッパが吹き鳴らされます。ここから七人の天使によって地に対する一つひとつの審きが開始されていきますが、私たちはこの終末的な出来事の意味を考え、そこから何を学び取りどう生きるべきかを、自分の人生の現実の中にまで落とし込んでいかなくてはなりません。神の審きは確実に行なわれるのですが、ただそれに恐怖するのではなく、主イエスのメッセージを聞き取ることが重要であります。

【本論】

さて、七つのラッパを持つ七人の天使がラッパを吹く用意をした。（8:6）

主の日（終わりの日）が来るとラッパが吹き鳴らされるということが、旧約聖書でも予告されていました。

その日は怒りの日、苦しみと悩みの日、荒廃と滅亡の日、闇と暗闇の日、雲と密雲の日、城壁に囲まれた町とその高い塔に向かって、角笛と鬨の声上がる日だ。（ゼファニヤ 1:16）

今日の箇所が登場する「七人の天使」は、数多い天使の中でも特に高い地位が与えられている存在でしょう。彼らがラッパを吹き鳴らすと地に災いが下り、その影響でおびたしい人々が命を落とす結果となる。まずは概観として、第一から第七までの災いがどのように展開するかを見ておきましょう。

- 第一：血の混じった雹と火が地上に投げ込まれる
- 第二：海
- 第三：川と水源
- 第四：天体
- 第五：神に敵対する人々に苦痛が与えられる、暗闇への言及
- 第六：ユーフラテス川に関連
- 第七：天上の大きな声、雷など

これらの災いの特徴として、出エジプト記の中でイスラエルの民がエジプトを脱出するに際して神がエジプトに下された「十の災い」とかなり内容が重複しているという点が指摘されます。エジプトにとっては裁きとなり、イスラエルにとっては救いとなった。このことに照らして見ると、黙示録における審きは、神に敵対する人々への神の怒りと、地の苦しみから解放される神の民の両面をコインの表と裏のように描いていると言えるでしょう。

本論 1. 第一のラッパ

第一の天使がラッパを吹いた。すると、血の混じった雹と火が生じ、地に投げ入れられた。地の三分の一が焼け、木々の三分の一が焼け、青草もすべて焼けてしまった。(8:7)

最初の災いは「**血の混じった雹と火**」であると言われています。それが地を焼け野原にしてしまうと言われているから、落雷を伴う雹という異常気象が想像できるでしょう。歴史的にも巨大な雹の記録があり、世界最大級のものでは、1917年6月29日に埼玉県大里郡熊谷町に降った直径29.6cm/重さ3.4kgというものがあります。カボチャ大の氷の塊がバラバラと降ってきたら、屋内にいても命は助からないかもしれません。世の終わりにはそれを超える災害が起きたとしても不思議ではないでしょう。

この第一の災いの内容は、出エジプト記では9:13-25に出てくる第七の災い(雹による裁き)に該当します。その時には、「**ファラオの家臣のうち、主の言葉を畏れた者は、自分の僕や家畜を家に避難させた。しかし、主の言葉に心を留めなかった者は、その僕や家畜を野に放置した**」(出9:20-21)とあり、更に「**雹は、エジプト全土で野にあるすべてのものを、人から家畜に至るまで打った。雹はまた、野のすべての草を打ち、野のすべての木を砕いた。ただし、イスラエルの人々がいるゴシェンの地には、雹は降らなかった**」(出9:25-26)とあるように、神を畏れた者は命が守られ、予告を無視した者はことごとく命を失ったことが分かります。ここから先の審きのすべてに言えることですが、天使によってラッパが吹き鳴らされる時、何らか

の予兆と警告は与えられるものと想像します。そのとき、神の使いのメッセージをどう受け取るか、どう行動するかで、その結果は違ってくることになるでしょう。

「三分の一」とは、その審きがまだ完全ではないこと、尚も悔い改めの余地が残されていることを示します。

本論 2. 第二のラッパ

第二の天使がラッパを吹いた。すると、火の燃え盛る大きな山のようなものが、海に投げ入れられた。海の三分の一が血に変わり、海に住む生き物の三分の一が死に、船の三分の一が壊された。(8:8-9)

第二の災いでは、「火の燃え盛る大きな山のようなもの」が現れます。火山の噴火のことだと思われませんが、「海に投げ入れられた」というのはおそらく溶岩が海に流れ込む様子を描いているのでしょう。

紀元 79 年にも、ポンペイの町を埋め尽くし港にあった多くの船を破壊したヴェスヴィオス火山の噴火という出来事があったようですが、それはまるで世の終わりの様相を呈していたのかもしれませんが。私たちの住む日本列島も火山列島であり、活火山は 100 以上存在すると言われていています。富士山の噴火の懸念は年々高まってきており、私自身も数年前の冬に東名高速道路から富士山を見たときに山頂に雪がほとんど被っていない光景に何か不気味なものを感じたことがあります。山自体が熱を帯びてきているのではないだろうか。1707 年の宝永大噴火の時には、大量のスコリアと火山灰が噴出した大災害となりました。

「この噴火は日本最大級の地震である宝永地震の 49 日後に始まり、江戸市中まで大量の火山灰を降下させるなど特徴的な噴火でした。噴火の 1~2 か月前から山中のみで有感となる地震活動が発生し、十数日前から地震活動が活発化、前日には山麓でも有感となる地震が増加しました(最大規模はマグニチュード 5 程度)。12 月 16 日朝に南東山腹(今の宝永山)で大爆発を起こし、黒煙、噴石、降灰があり、激しい火山雷があったとのこと。また、その日のうちに江戸にも多量の降灰があり、川崎で 5 センチメートル積もっています。」(富士山の噴火史について)

(<https://www.city.fuji.shizuoka.jp/safety/c0107/fmervo000000oxtb.html>)

世の終わりには想像を絶する天変地異により世界中の火山が火を吹くということが起きるのかもしれませんが。それによって、海水の音度が上昇し、多くの海の生物が死に絶えることが予告されていると思われ。現代における火山の噴火を何でもかんでも「第二の天使のラッパ」に結びつけることは控えなくてはなりません。読者の姿勢としてはいつでもそのような災害は起こりうるとして、神の御前に心を備えて生きていることが大切です。

出エジプト記でこれに該当する記事は、ナイル川が赤く血に染まった第一の災いでありましょう(出 7:20-21)。

本論 3. 第三のラッパ

第三の天使がラッパを吹いた。すると、松明のように燃えている大きな星が、天から降って来て、川という川の三分の一と、その水源の上に落ちた。この星の名は「苦よもぎ」と言い、水の三分の一が苦よもぎのように苦くなって、そのために多くの人が死んでしまった。

(8:10-11)

「松明のように燃えている大きな星」とは、隕石のことと思われます。地球に壊滅的なダメージを与える隕石の衝突というのは、46 億年の地球の歴史において何度も起きているようですが、中には小惑星サイズのものもあったとされています。比較的最近では、2013 年にロシアに落下した「チェリャビンスク隕石」が記憶に新しいでしょう。この時は凍った湖面に直径 8m 程度の穴が空いたようですが、衝撃波によって 4000 以上の建物に損壊を及ぼしたそうです。¹

地上の川と水源の三分の一を壊滅させる隕石というのは、一体どれくらいの規模のものなのでしょう。この箇所の一つ印象的なのは、隕石に「苦よもぎ」という名称が付けられていること、そしてその影響で水が苦くなると言われていることです。「苦よもぎ」とは、パレスチナに生育する植物で、根っここのところに苦い液体を含んでいるそうです。エレミヤ書にはこのような記事があります。

彼らは、そのかたくなな心に従い、また、彼らの先祖が彼らに教えたバアルに従って歩んだ。それゆえ、イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。私はこの民に苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。(エレミヤ 9:15)

苦よもぎは「不幸」と「悲しみ」の譬であり、神の審きの「苦さ」を表すものとして聖書に何度も登場します。ここでも、神に敵対する者に及ぶ災いの一つとして描かれていることとなります。

本論 4. 第四のラッパ

第四の天使がラッパを吹いた。すると、太陽の三分の一、月の三分の一、星という星の三分の一が撃たれ、それらの三分の一が暗くなり、昼はその光の三分の一を失い、夜も同じようになった。(8:12)

ここで言われている審きは、日食や月食によってもたらされるものと考えられるでしょう。天体の光を失うという経験は日常的に見られるものではありませんが、小規模のものは時々起きています。出エジプトの時には、三日間エジプト全土に光が届かなかったことが記録されています。

モーセが天に向かって手を伸ばすと、暗闇がエジプト全土に三日間臨んだ。(出 10:22)

¹ 著名な物理学者である保江邦夫氏は、2025 年にフィリピン沖に隕石が落ちる可能性があるという情報をアメリカの宇宙研究組織から入手しているという。

もう一つ、闇の記録として思い起こすのは、主イエスの十字架の場面でしょう。

さて、昼の十二時から全地は暗くなり、三時に及んだ。(マタイ 27:45)

主イエスの死に伴い、地震が起き、岩が裂けたとも言われています。神の審きが、多くの罪人に代わって、主イエスに対して下されたことが示されている。

今日は最初の四つの災いについて学びましたが、いずれの審きも部分的であり、まだ救済の余地が残されているということが大事なポイントであると思われます。神からの警告に耳を傾けない人々に向けて、段階的に審きが執行されていく。しかし、その裏側で審きを免れている人々もいるのです。それは、警告に耳を傾け、神を恐れ、罪を悔い改めた人々です。

【結論】

私たちは黙示録の一読者として、このような記事をどのように理解すべきでしょうか。私たちの現実には、まだこれほどの苦難の日は訪れていません。しかし、いつでも心備えて生きている必要があります。いつ何時、何が起こるかは分からないから、そして主イエスご自身がこのように警告しておられるからです。

気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたは知らないからである。

(マルコ 13:33)

信じる人にとって、審きの日は救いの日となる。神に敵対する者が審かれるとき、同時に救いが完成する人々もいるのです。私たちも心を引き締め、いつ主とお出会いしてもよい備えをして生きていきたいと思えます。また、災害に対する備えも怠らないようにしましょう。

【祈り】

すべてを公正に裁かれる天の父なる神様。世の終わりの裁きは、私たちには理解しきれない側面が多くあります。しかし、一つの真理を知っています。それは、誰もが神の御前に立たなくてはならないということ、そしてその日に備えて生きているべきことです。主イエスが繰り返し弟子たちに語られたように、私たちも霊の目を醒まして生きていることができますように。憐れみをもって私たちの人生を終わりまで導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

世の初めから終わりまで、すべての出来事を正しく裁き給う、父なる神の愛、弟子たちに「目を醒ましている」ことを教え、ご自身の日に備えさせ給う、主イエス・キリストの恵み、

贖われた者として聖なる神の御前に立たせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。